楽しみながら論理力が育つ授業をめざして

～活動型単元学習を通して～

三原市立田野浦小学校　周才規子

1　実践の趣旨

４月に行った標準学力調査の結果，言語についての漢字に関する知識・理解・技能は正答率（９６．１%）が高い。それに比べ「そのできごとがなぜ楽しかったのかを書く」という書く能力の正答率（４１．４%）が低い。また，国語への関心・意欲・態度の正答率（７９．４%），読む力の正答率（８０．７%）は言語に関する知識・理解・技能の正答率ほど高くはない。授業では「どうしてそう思ったの？」と理由をたずねるとそれまで元気よく手があがっていたのに急に静まり返るという状態であった。これは，繰り返し学習によって言語の習得はできているものの，意欲的に根拠を明らかにしながら読み，理解を深めることができていないのではないかと考えた。

そこで，活動型単元学習を設定すれば，児童自らが意欲的に教材を読み，楽しみながら論理力が育つであろうと考えた。学習の中で「どうしてそう思ったの？」と問い，根拠を明らかにすることで，論理的に筋道立てて考える力をつけたい。１時間の授業で「ああ楽しかった。〇〇がわかったよ。」と児童が答える国語科の授業を目指したい。

2　実践の概要

実践１（２学期）

（１）単元名　紙しばいをつくろう！　教材「さけが大きくなるまで」(教育出版２年下)

（２）単元の目標

〇さけに関心をもち，文章を読もうとする。【関心・意欲】

〇紙芝居の発表では，順序を考えながら聞くことができる。【話すこと・聞くこと　イ】

〇場所や時間，さけの大きさや様子を表す言葉に気をつけて文章を読むことができる。【読むこと　イ】

〇主語や述語及び指示語や接続語に気をつけて読むことができる。【言語事項（１）エ（ア)】

（３）手立て

①順序をつかませるために，挿絵と文章を段落のかたまりごとにばらしたカードを用意し，挿絵や文章を手がかりに並べ替えをさせる。どうしてその順序にしたのか理由を尋ねることで，「場所」「時間」「さけの大きさや様子」に着目させながら順序をつかませる。

②順序をつかませるために，言葉と言葉，文と文，段落と段落の関係に着目し，一人学習で順序を決める手がかりになる言葉に線をひかせる。

③順序をつかませるために「このように」を使って問いに対する答えをまとめさせる。

④順序をつかませるために，「さけが大きくなるまで」で学習した「場所」「時間」「さけの大きさや様子」に着目すると順序がわかるという学習をもとに，児童が選んだ資料を読み取り，オリジナル「〇〇が大きくなるまで」という紙芝居を作らせる。

⑤順序をつかませるために，友だちの紙芝居の発表を順序が正しいかどうか考えながら聞かせる。

（４）指導計画

１次（１時間)	・紙芝居を作ることを知り，単元全体の学習の見通しを持つ。 ・さけについて知っていることを絵と文で表す。
２次（４時間)	・挿絵と文章を段落のかたまりごとにばらしたカードを用意し，挿絵や文章を手がかりに並べ替える。そこで「場所」「時間」「さけの大きさや様子」に着目しながら順序をつかむ。 （活動目標）紙芝居をつくろう

	（学習目標）「場所」「時間」「さけの大きさや様子」に着目させながら，内容を読み取らせ，順序をつかませる。
３次（４時間）	・紙芝居を作るために必要な事柄（「場所」「時間」「大きさや様子」）を集め，順序を考え，紙芝居を作る。 ・紙芝居を見ながら，順序が正しいかどうか考える。

（５）授業の様子

①１次

単元全体の学習計画を児童と話し合いながら作成し，単元の終わりにオリジナル紙芝居を作るということに意欲をもち興味を示した。

初めに，紙芝居を作るにはどうしたらいいか，意図的に順序が違う「ミニトマトが大きくなるまで」という紙芝居を見せると，児童は１学期にミニトマトを育てていたのでその経験をもとに順序が違うことに自然に気づいていった。これにより，児童は順序が違うと紙芝居にならないことを理解する。この「順序」を意識づけたのが，順序をつかませるこれからの学習で大切となった。

次に，説明的文章「さけが大きくなるまで」を読み進める前にさけについて知っていることを絵と文章で表現させた。結果，児童は「さけについてもっと知りたい。」『「さけが大きくなるまで」をはやく読みたい。』と学習意欲がさらに高まった。

これらのことから，児童は単元全体の学習の見通しをもつことによって，興味・関心・意欲を高めることはできた。

②２次

挿絵と文章を段落のかたまりごとにばらしたカードを作成し，３回に分けて児童に配り，学習の時間ごとに紙芝居を仕上げていく活動を組んだ。（手立て①）（手立て②）

初めに形式段落①を配った。児童は，①にある「どこで生まれ，どのようにして大きくなったのでしょう。」という問いの文から，このあと配られる教材文には，さけがどこで生まれ，どのようにして大きくなったのかが書いてあると予想を立てることができ，その上で紙芝居①を完成させた。これは，紙芝居作りができるという楽しみだけでなく，１次でさけのことがもっと知りたいという興味・関心・意欲を高めておいた成果である。

次に形式段落②と形式段落③を配ると，児童は「川上へ川上へとすすんでいきます」や「やがて，水のきれいな川上へたどりつく」また「たまごをうみに」や「 たまごをたくさんうんで」という「場所」や「様子」を表す言葉や文章を手がかりに順序を決め，少しずつ言葉にこだわり始めてきた。紙芝居②③が完成し，児童は紙芝居の場面が増えてくることを喜び，次の学習を大変楽しみに待つようになってきた。

最後に形式段落④と形式段落⑤と形式段落⑥と形式段落⑦⑧と形式段落⑨⑩の５枚のカードを配った。児童は「秋になるころ」や「冬の間に」や「春になるころ」という時（季節）を表す言葉，「二センチメートル」「五センチメートル」「十センチメートル」「赤ちゃん」「小魚」「子どもたち」「体がしっかりしてくる」「ぐんぐん大きく」「ぶじ生きのこって大きくなったさけ」という大きさや様子を表す言葉，「川を下りはじめる」「川を下る」「川を下ってきた」「川口」「海」「北の海からもとの川へ」という場所を表す言葉や文章を手がかりに順序を決めていった。ほとんどの児童が手がかりになる言葉と言葉，文と文，段落と段落を比べながら内容を読み深めることができていた。これは，児童にとって楽しみにしている紙芝居づくりという活動目標と，段落のかたまりごとのカードを並び替えるために，必然的に内容を読み取る学習目標が正しく設定されていると考える。つまり活動の中にきちんとした学習があるのである。

本時の終わりには，「このように」を使い，児童自身が筆者になったつもりで⑪段落を書かせた。（手立て③）児童は，まとめの段落を意識し，「どこで生まれ，どのようにして大きくなったのでしょう。」という問いの文に対する答えをまとめることができた。このことによってさらに全体を読み，自分の言葉でまとめることができた。

③３次

２次で学習した「時（季節）」「場所」「大きさや様子」を表す言葉は，順序を決める手がかりになると

いうことをもとに，「○○が大きくなるまで」というオリジナル紙芝居を作る活動を行った。

まず，動植物の図書の中から「アサガオ」「チョウ」「にわとり」「かまきり」など１０種類の資料を予め作成しておき，そこから好きな資料を選択させ，順序を決める手がかりになる言葉「時（季節）」「場所」「大きさや様子」に線を引き，場面わけ（何枚の紙芝居にするか）をした。児童は，写真や手がかりになる言葉から７～１０枚の紙芝居を作った。２年生の児童にとって図書１冊の全体から必要な情報を取り出すことは難しいので，こちらが作成した資料を使い，どの児童も最後まで意欲的に紙芝居作りに取り組むことができた。

紙芝居の発表会では，友だちの紙芝居の順序があっているかを確かめながら聞くことができた。児童の感想の中に「○○ちゃんの紙芝居は，大きくなっていく順番がよくわかったのでいいです。」「○○くんの紙芝居は，言葉と一緒に絵でも説明してあって，だんだんと大きくなっていくのがよくわかる絵でいいです。」というように順序を意識しているものが多かった。日ごろ日記などで書くことが難しい児童も「○○くんの紙芝居は，上手に作っていて○○が大きくなっていくのがよくわかりました。」と感想をもらいたいへん喜んでいた。自分が作ったオリジナル紙芝居の良い点を学級の友だちにも評価してもらえたところが「読む」「書く」活動の自信につながる。

（６）成果と課題

どうしてこの順序になるのか，理由を考えさせることで内容を読み取り，「時（季節）」「場所」「大きさや様子」を表す言葉を手がかりに，紙芝居の順序を考えることができた。成果として，児童は言葉にこだわり，言葉と言葉・文と文・段落相互の関係にまで目をむけることができるようになってきた。

ある日の給食時間の校内放送が流れてきたときのことである。「ギッコンギッコンいったりきたりするものなあに？」の問いに児童は「シーソー」と自信満々で答えた。後日「正解はブランコ」というのがわかり「ギッコンギッコンを手がかりにしたのがいけんかった。」「いったりきたりを手がかりにしたらブランコなのに。」「でも，シーソーも地面からみたらいったりきたりじゃ。」「ほんまじゃ，でも地面からは見んよ。」「ギッコンギッコンというんじゃなくってギーギーならよかったのに。」と楽しそうで悔しそうな会話が聞こえてきた。日々の生活の中でも根拠を明らかにするような会話が聞かれるようになってきた。

課題として，紙芝居づくりでは接続詞に着目させることは難しかった。今後は，「はじめ」「中」「おわり」の文章構成にも目をむけさせ，接続詞の指導にも力を入れていきたい。

実践２（３学期）

（１）単元名　せかいのかくれんぼガイドをつくってあそぼう！

教材「せかいのかくれんぼ」（東京書籍２年下）

（２）単元の目標

○かくれんぼに関心を持ち，文章を読もうとする。【関心・意欲】

○「せかいのかくれんぼ」の発表では，順序を考えながら聞くことができる。

【話すこと・聞くこと　イ】

○かくれんぼをするための準備物は何か，おにや隠れる側の人のすることはなにか，どうやって遊ぶのかを表す言葉に気をつけて文章を読むことができる。【読むこと　イ】

○主語や述語及び指示語や接続語に気をつけて読むことができる。【言語事項（１）エ（ア）】

（３）手立て

①せかいのかくれんぼの遊び方の順序をとらえさせるために，全員でかんけり遊びをし，遊び方の共通認識をもたせるとともに，「かんけり」に対して興味を持たせる。

②教材文の大まかな事柄の順序をとらえさせるために，「はじめ」「中」「おわり」の構成をつかませ，どうしてそこで区切ったのか理由を問うことで大まかな内容を読み取らせる。

③せかいのかくれんぼの遊び方の順序をとらえさせるために，活動目標を「ハンター」や「プンタックウンプット」をして遊ぼう，学習目標を「ハンター」や「プンタックウンプット」の遊び方を読み取ろうとする。

④説明文の大まかな順序をとらえさせるために，「せかいのかくれんぼ」で学習した「はじめ」「中」「終わり」の構成や遊び方の説明の仕方をもとに，児童が選んだ資料を読み取り，オリジナル「せかいのかくれんぼ」「せかいのあそび」という説明文を書かせる。

⑤友だちの説明文を聞きながら，説明文の大まかな順序や遊び方の説明が順序正しくできているかどうか考えさせ，実際にその遊びをやってみる。

（4）指導計画

1次（2時間）	・「せかいのかくれんぼ」をやってみることを知り，単元全体の学習の見通しを持つ。 ・「かんけり」の遊び方を文章に表す。
2次（4時間）	・「せかいのかくれんぼ」を「はじめ」「中」「おわり」にわける。そこで書かれている内容に着目し構成をつかむ。 （活動目標）「はじめ」「中」「おわり」の3つに分けよう。 （学習目標）教材文の構成を大まかにとらえさせ，書かれていることの大体を読み取らせ，順序をとらえさせる。 ・フィンランドのかくれんぼ「ハンター」について，用意するものと遊び方を読み取り，順序をつかむ。 （活動目標）「ハンター」をしよう。 （学習目標）「ハンター」について用意するものや遊び方を読み取らせ，順序をとらえさせる。 ・インドネシアのかくれんぼ「プンタックウンプット」について，用意するものと遊び方を読み取り，順序をつかむ。 （活動目標）「プンタックインプット」をしよう。 （学習目標）「プンタックインプット」について用意するものや遊び方を読み取らせ，順序をとらえさせる。
3次（4時間）	・オリジナル「せかいのかくれんぼ」「せかいのあそび」の説明文を作るために必要な事柄（「国の名前」「遊びの名前」「遊び方」）を集め，順序を考え，説明文を作る。 ・説明文を聞きながら，順序が正しいかどうか考える。

（5）授業の様子

①1次

単元全体の計画を立てる前に「かんけり」をさせ，日本のかくれんぼである「かくれんぼ」の遊び方の順序を児童全員の共通認識としてもたせた。そうすることで，後の「せかいのかくれんぼ」の読み取りの際に生かすことができた。（手立て①）

児童は，「かんけり」を大変楽しみこれから始まる「せかいのかくれんぼ」に対して興味を示した。児童とともに単元全体の計画を立て，単元の終わりに行う「せかいのかくれんぼ」に意欲と興味をもった。

また，日本の「かくれんぼ」について用意するものや遊び方を書くことは，すでに述べたとおり，かんけりの遊び方については児童全員の共通認識があったので，順序正しく書くことは容易であった。この自分でも書けるという自信がこれからの学習をより意欲的にした。

②2次

「せかいのかくれんぼ」の教材文を「はじめ」「中」「終わり」の構成に分け，どうしてそこでわけたのか理由を発表させながら，その教材になにが書かれているのかを読み取った。（手立て②）

はじめに，形式段落②を「はじめ」とすのか「中」とするのか意見が分かれていたが，教材文のだいたいを読み取った後には，「中」には，フィンランドの「ハンター」やインドネシアの「プンタックウンプット」の遊び方が書かれているのに，「かんけり」は「かくれんぼのなかま」としか書かれていないので「中」ではない，と考えがまとまった。また「おわり」の部分に形式段落⑩も入るという意見に対しては，⑩はインドネシアの「プンタックウンプット」の遊び方が書かれているので，⑩は「中」であり「おわり」で

はない。さらに「おわり」というのは，「まとめ」であり，まとめは形式段落⑪だから「おわり」は⑪だけとなると考えがまとまった。このように，児童は内容を読み取りながら文章構成の組み立てを考えることができた。

次に，フィンランドの「ハンター」の遊びのやり方の順序を「まず，はじめに」「それから」「～たら」という接続語に気をつけながら読むことができた。また，児童は日本の「かんけり」のあそびのやり方をよく知っていたので，「かんけり」の遊び方と比べながら読みとっていた。その後，実際に「ハンター」をしてみた。(手立て③) 児童は，やりながら「教科書に三十数えると書いてなかったよ。」「おにじゃない人がけったらすぐににげないといけないね。」と教材文を根拠に遊ぶ方を確認しながら楽しむことができた。インドネシアの「プンタックウンプット」も「ハンター」と同じように，遊び方の順序を読み取ったあと「プンタックウンプット」をし，遊び方の順序を確認した。

③３次

２次では，教材文「せかいのかくれんぼ」は「はじめ」「中」「おわり」の文章構成であり，筆者である大貫さんは，「せかいのかくれんぼ」は国によってちがいがあり，子どもたちに楽しまれているということを訴えたいために「中」の部分で二つの事例をとりあげている，ということを学習した。このことを生かして，「せかいのかくれんぼ」「せかいのあそび」についてオリジナル説明文を書いた。(手立て④)

まず，一つめの事例は自分たちの国「日本」の「かんけり」をとりあげ，二つ目は「せかいのあそび」が書かれている図書資料から選んだ国の一つの遊びをとりあげた。児童は，学習した文章構成の順序と遊びのやり方の順序に気をつけながら書くことができた。そして，代表作としてトルコの「カシュカシュ」をして楽しんだ。(手立て⑤)

（６）成果と課題

本単元に入る前に「わたしの見学ノート」という書く領域の学習をした。その時，本学級の何をどのように書いていいのかとらえにくいという実態を踏まえ，文章構成を学習すればその課題の解決につなげることができることを意識づけ，「パン工場の見学」という児童の作品の文章構成をとらえる学習を仕組んだ。その時の学習経験をもとに，児童は「せかいのかくれんぼ」を「はじめ」「中」「おわり」に分け，どうしてそこが「はじめ」「中」「おわり」になるのか理由を考えることで，内容を読み取ることができたことが成果である。また，かくれんぼをするという活動目標に対して，遊びのやり方，つまり順序を読み取る力をつけるという学習目標が達成できたことも成果である。

課題として，教材文の読み取りのさせかたや時間の工夫を行い，効率よく学習をすすめる教材研究を今後も引き続き行いたい。

３　成果と課題

４月のはじめ，「どうしてそう思ったの？」「どうしてそこで分けたの？」と問いを投げかけても答えが返ってこなかった教室から１年たった今，「先生の言いたいことがわかります。きっと理由を聞くと思います。」という児童の声が聞こえる。１年間「どうしてそう思った？」「どこにその手がかりが書かれているの？」と問い続けてきた結果であろう。

先日のチャレンジテストは平均９５点であった。新しい教材文（説明的文章）を読む力が確実に育ってきている。これからも発展し続ける児童の力を信じ，１時間の授業で「ああ楽しかった。〇〇がわかったよ。」と児童が答える国語科の授業を目指したい。